

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01178

研究課題名(和文) カタルーニャの人間の塔に関する人類学的な文化遺産研究

研究課題名(英文) An Anthropological Heritage Study on Human Towers in Catalunya, Spain

研究代表者

竹中 宏子 (Takenaka, Hiroko)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：30376967

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：カタルーニャの民俗文化「人間の塔」(Castells)は、伝統行事のみならず、カタルーニャ独立運動等の政治的な場にも登場してきた。本研究は人間の塔を対象に、カタルーニャにおける文化遺産の歴史的变化とその現在性を考察するものである。人間の塔とは、人が人の肩に立位の状態で乗り、積み上がるもので、高いもので10mを超える。つまり、危険と隣り合わせの活動なので、属性や思想等の様々な違いを超えて協調・同調する必要がある。本研究では、その「寄せ集まり」方とそれを維持する創意工夫を、チーム「サンツ」を対象に、技術的な側面よりも社会的な側面の重要性を考察し、LPP論における十全的参加についても再検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

カタルーニャ独立運動等の場面によく登場するので、人間の塔は政治的な活動に見られがちだが、本研究では塔を建てる人びとの多様な伝統文化との関わり方を捉え、イメージとは異なる人びとの考えや生き方を考察した。そこでは多様性を担保しながらも協調・同調できる創意工夫を抽出し、また、一見不真面目に見える参加者(「潜在的成員」)に備わる重要性も提示した。これらはダイバーシティを実現する上で重要な視点となる。

研究成果の概要(英文)：Human towers (“Castells”), Catalan popular culture, have appeared not only in traditional events, but also in political settings such as the Catalan independence movement. This research examines the historical changes and the present of the cultural heritage in Catalonia, concentrating on human towers. They are a plastic culture that people mount in a sanding position and the highest ones reach 10m; it is an activity with danger, so it is necessary to collaborate and maintain harmony between the participants in beyond diversity in all aspects, such as social background and thoughts. In this research, through carrying out anthropological fieldworks in a group of human towers, “Sants” (Castellers de Sants), we take more importance in the social aspect than in the technical one to understand their way of synchronising different people and maintaining diversity. The theory of LPP (Legitimate Peripheral Participation) is also reconsidered, especially on full participation.

研究分野：文化人類学

キーワード：人間の塔(Castells) カタルーニャ バルセロナ 文化遺産 アソシエーション LPP論 アッサンブラージュ(Assemblage) 実践コミュニティ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

スペインの自治州の一つに数えられるカタルーニャでは、独立の賛否を問う住民投票が2017年10月1日に行われ、独立賛成票が圧倒的多数という結果を残した。カタルーニャの独立運動は今に始まったものではないが、近年、こうした「カタルーニャ」が前面に出てくるようなイベントがある度に、人の身体が塔のあらゆる部分となり高く積み上げられる「人間の塔(Castells)」が登場する。それはカタルーニャを表象する伝統文化と一般的に説明される。その起源は18世紀末と言われ、その後の紆余曲折を経て、2010年にはUNESCOの世界無形文化遺産リストに名を連ね、今ではカタルーニャを代表する文化遺産として確固たる地位を獲得している。しかし、少なくともフランコ独裁政権時代(1939~1975年)には、手をつなぎ輪になって踊るサルダナー(sardana)がカタルーニャを代表する伝統的なパフォーマンスの筆頭に挙げられ、スペイン中央政府への抵抗のシンボルと捉えられていた。

こうした文化遺産の研究について、文化人類学においては、文化の客体化あるいは伝統の創出論として、地域の伝統や文化などの構築的な側面が明らかにされてきた。飯田は、それまでの文化遺産研究を振り返り、1990年代以降の新しい文化遺産に着目しながら、この問題に取り組むことは観光人類学の問題意識を継承しつつさらに発展させるもので、文化人類学が現代的課題に対応していくために一つの有効性を示すという(飯田卓, 2017年)。そこでは、1990年代以降、現代の人びとの生活と共に変化しうる景観や建造物、または現代の人びとが担う芸能や祭事などが文化遺産として含まれるようになり、変化と担い手という二つの要素をどのように考えるかが鍵だと指摘している。

一方、スペインの民俗学あるいは文化・社会人類学の特徴のひとつに、かつては王国で、現在は自治州であり「地方」と呼び得るような歴史的・文化的・地理的範囲ごとに展開している点が挙げられる。その中でカタルーニャでは19世紀のロマン主義の影響を強く受け、王国だった過去の時代や自然を礼賛し、民衆的・伝統的なものを称揚する形で展開された。当然のことながら地域ナショナリズムと結びつき、歴史を自らの理想の下に再構築し、文化的に異なるアイデンティティをもつ証として、地方言語の復活や保護を支持するものであった。この動きは「ルネッサンス」(Renaixença)と称され、その後、自治州の政治と直接の結びつきを強めて行った。21世紀に入り、冒頭に上げたような、カタルーニャ独立の賛否を問う住民投票における独立賛成票の圧倒的多数という結果は、既存の国家を揺るがす状況を示唆することとなった。その後、どうなったのか。本研究では、カタルーニャの独立運動と民俗文化である人間の塔との関係の行方を追い、社会変化と文化遺産との関係性を文化人類学の視点から考察する。

2. 研究の目的

本研究では、カタルーニャ・ナショナリズムの高揚に直結するような文化遺産である人間の塔の現在と、それが誰によって、どのように構築されたのかの過程を明らかにすることを目的としている。カタルーニャに100以上存在する人間の塔を建てるグループ(以下、チーム)の中から、個人的に関係性を築いてきたバルセロナの「サンツ(Castellers de Sants)」を主たる調査対象とし、研究を進める。

3. 研究の方法

本研究は、文化人類学的なフィールドワーク(参与観察、聞き取り調査)と文献調査を基礎とし、次の点を明らかにしていく。

- (1) 人間の塔に関する先行研究から、その歴史と地域における意味を考察する
- (2) 歴史的な文献からカタルーニャ主義の変化を捉え、フィールドワークからその現在性を捉える
- (3) 聞き取り調査およびチームが持つ資料から、サンツの沿革とチームが位置する街区の歴史・社会的特徴を把握する
- (4) 参与観察と聞き取り調査により、カタルーニャ主義と「サンツ」のメンバーとの距離感を分析する
- (5) 参与観察と聞き取り調査から、「サンツ」のメンバーの人間の塔への関わり方と、カタルーニャ人間の塔連盟(CCCC)の理想との共通点や相違点を検討する

4. 研究成果

(1) 人間の塔の先行研究、歴史、政治性

起源は諸説あるものの、人間の塔は一般的に、カタルーニャの南に位置するバレンシアで踊られていた「バレンシア人の踊り(ball de valencians)」から派生し、最も古くはバイス(Valls)の祭りでは1791年に実演された記録が残る伝統行事である。元来、カタルーニャ南部限定の伝統文化であった人間の塔は、カタルーニャ中で多くのチームが設立された1990年代には、伝統的な人間の塔文化の地域とそうでない地域の差が事実上消滅し(Botella, 2018)、正にカタルーニャを代表する伝統文化の地位を獲得した。2010年にはUNESCOの世界無形文化遺産に登録され、その人気と知名度はカタルーニャ地方のみならず、スペイン国内外に広がっていった。

最も大きな転機は、2010年11月に人間の塔が世界遺産登録であると考察される。「人間の塔博物館」を擁し「人間の塔発祥の地」を誇る町「バイス」(Valls)では、大々的に「人間の塔0キロメートル地点」と謳い、人間の塔に関するシンポジウムが毎年開かれるようになった。先行研究に関して、世界遺産登録前には、ごく僅かの歴史的な研究と実践者によるジャーナリスティックな記述やエッセイにほぼ限定された内容であったが、現在では、非常に多岐にわたる視点から人間の塔は分析されている。人間の塔への関心の度合いを示す象徴的な文献の一例として、2017年から2020年にかけて出版された6巻もの事典が挙げられる。その内容は、「人間の塔の歴史」(1~2巻)、「人間の塔の技術と科学」(3巻)、「人間の塔に関する人類学と社会学」(4巻)、「人間の塔の展開。人で構成される他地域の塔」(5巻)、「その他のテーマ」(6巻)となっている。

人間の塔の政治性を考える上で外せないのは、カタルーニャ独立運動である。これは歴史上常にみとめられたものの、直近では、2006年のカタルーニャ自治憲章制定に対して2010年にスペイン政府が下した違憲判決が契機となり、独立の機運が年々高まり、2017年のカタルーニャ独立住民投票にまで至った経緯を挙げることができる。こうした示威行動においては、常に人間の塔が登場するようになり、メディアへの露出度も上がり、関係者以外からはスペイン中央政府への抵抗や独立運動の象徴として見られる可能性が高くなった。

しかし、塔を建てるメンバーの視点からは、人間の塔のチームによって、また、チーム内でもメンバーによって異なる現実をフィールドワークから捉えることができ、政治性も多様な形で存在することを把握した。サンツに関して言えば、例えばカタルーニャ独立運動とも関連が深い「カタルーニャの日」(9月11日)には、伝統行事としてのパレードには参加するが、政治的なプラットフォームで組織されたデモ行進や集会にはチームとして参加はしない。思想的な機会については、個々人に参加の自由を委ねる態度を示している。

現在、実際にサンツの練習では、カタルーニャ独立に賛成の意を表明するピンバッチをつけているメンバーもいれば、「独立運動と同一視されたくない」と意思をあらわにする者も観察された。新聞記事によると、カタルーニャの日のデモ行進および集会参加者も、住民投票直前・直後の2017~2018年をピークに、減少の一途をたどっている。カタルーニャ独立の機運が弱まった原因には、2020年以降のCOVID-19感染拡大の影響も大きいだろう。したがって本研究でも、こうした現状を捉えるべく、チームに存する、思想を初めとする様々な側面での多様性を保ちながらも、難易度が高い塔を建てるために協調あるいは同調できる、その鍵を探究することとした。

(2) 人間の塔の現在—サンツを通して— : 社会的に建てられる人間の塔

(2)-1. 社会的側面を担うスタッフ

サンツは、他の多くのチームと同様、4歳以上であれば誰でも入会できる。本研究ではサンツをボランティア・アソシエーションとして捉え、研究を進めた。サンツは組織として、600人余りのメンバーを束ねる2種類の幹部的なグループを持つ。ひとつは、技術的にチームを主導するテクニカル・チームで、もうひとつは、社会的な側面を担い、人間の塔を間接的に支えるスタッフたちである。本研究では、特に社会的に塔を支えるスタッフに着目した。

社会的側面を支えるスタッフが担う仕事は大きく3部門に分かれている(「街区」、「渉外」、「事務・管理」)。社会的な側面を担うグループの責任者(president)は、テクニカルチームのリーダー(cap de colla)と連携しながらチーム運営を円滑に回していく。一つの部門には更にいくつかの係が設けられていて、そこにもそれぞれ責任者がいる。係の責任者を中心に担当スタッフ数名がそれぞれの仕事に携わっている。部門および係の責任者は話し合いの場に出席しなければならないばかりではなく、スタッフとしての仕事も他のスタッフと同様に実際に行うので、こうした役を引き受けるとかなりの時間と労力をチームのために費やすことは容易に想像ができるだろう。

こうしたスタッフの活動は、テクニカルチームの関わり方に比べて、表面的には塔を建てることに直接関わりがないように見えるかもしれない。しかし、イベント企画がなければ真面目に練習することの繰り返しにしかならず、家族や友人のような繋がりをつくることは難しいだろうし、遠方で行う実演では電車の切符購入や貸し切りバスの手配が必要であるし、また、広場にいったらメンバーの荷物をまとめて入れておく袋を用意したり、その見張りを手配する必要もある。街区部門のスタッフがそれぞれの担当で積極的に街区との関係を良好にすることにより、練習場である学校も快く使わせてもらえるし、街区内の色々な場を使う際に容易に協力が得られる。更に、街区内の企業や商店などから活動資金もチームに提供される。このように、直接的な技術とは異なる形で人間の塔がスムーズに建つことを下支えするのがスタッフの仕事である。

スタッフの仕事はチームを理解しているからできるのではなく、スタッフという役割を通じて「サンツの人間(borinots/borinotas)」になっていくプロセスが、参与観察と聞き取り調査からわかった。これはサンツが取るひとつの戦略とも捉えることができる。「見習い」に当たる準メンバーから正式なメンバーになって間もなく、スタッフに任命される場合が多く見て取れた。

(2)-2. 安全でアットホームな雰囲気の出発と維持、そして勧誘活動の工夫

より難度の高い人間の塔を建てるには、それだけ多くの人間が基層に必要である。サンツの場合、毎年5月と10月に友人を連れてくる練習日が特別に設けられているが、それ以外にも見学や参加は随時受け付け、近隣の広場などで体験イベントを行い、勧誘活動を行っている。

バルセロナにある7つの人間の塔チームの中からサンツを選んだ理由としてメンバーからよ

く聞かれる言葉が、「雰囲気良かったから」「みんな親切だから」という答えであり、この理由が住まいの近くにあるという利便性よりも重要な要因であることが聞き取りからわかった。逆に、入会当時は遠くに住んでいた者の中にも、容易に通えるようにわざわざサンツ街区に引っ越してくる者もいる。こうした経験を基にした比較から、サンツは高度な技術よりも、「親しみ易さ」「家族的であること」を特徴としていることが見て取れ、それがチーム選択のポイントにもなると理解できる。

最も重要で安定的な獲得が困難なのは、上層部3段を形成する子供たちである。中でも最も多くの代役を必要とするのは、特に上2段の子供たちである。高い時には10mを超え、常に揺れ動いている塔を上る子供たちについては、身体的な能力や技術と恐怖に耐えられる性格のみならず、その時の気分や体調を考慮し、誰を抜擢するか判断しなければならない。子供の行動はともかく予測不可能なので、できる限り多くの子供を集め教育する必要がある。また、彼らの成長のスピードも予測不可能である。優れた子供がいると思っけていても、チームとしては安心できない。その子は成長が早く、活躍期間が短いかもしれない。様々な意味で予測不可能な子供は、常に勧誘し、教育してかなければならない。

子供の勧誘で注意すべきは、本人だけの問題ではない点である。親の付き添いが要求されるので、親の勧誘でもあることを視野に入れる必要がある。ある子供の母親は、「子供を安全に預けられる点が重要だった」と言う。サンツでは、安全面には最大限の注意を払っていて、練習の前後に必ずストレッチを行い、必ずマットを敷き、子供たちにはヘルメット着用を義務付けている。また、彼らの「塔を建てられても、崩れることなく解体できなければ成功とみなさない」主義が子供を入会させるポイントともなる。親にとって子供の負傷が一番の心配事で、自分の子供をサポートし、受け止めるために自らもメンバーになった親もいるほどである。

このように、より高く、高度な人間の塔を建てるために必要な人材は、日々の勧誘によって獲得される。その鍵は、「親しみやすい」「家庭的」といったチームとしての雰囲気の良さと、チームが主義として守り、スタッフとテクニカルチームで実際につくり上げる安全性なのである。こうした社会的なつながりや工夫が、サンツには用意され、結果的に難易度の高い塔の成功に至るのだと分析した。

(3) 人間の塔の現在—サンツを通して— : 「十全的参加(者)」(LPP論)の再検討

高度な技術を必要とする人間の塔がたつ鍵は、主にメンバーが行う「日々の練習」にある。新しくサンツに参入する者はそこでのあらゆる経験を通して、サンツのメンバーシップを獲得していく。ここで想起されるのは、レイヴとウェンガーによる「正統的周辺参加」(Legitimate Peripheral Participation ; 以下、LPP)の視点である。

LPP論では、学習を「教える者/教えられる者」のような二項関係から考えたり、個が知識や技能を獲得する過程として理解するのではなく、当該コミュニティに参加(participation)する社会的過程と理解する〔レイヴ&ウェンガー 1993; Wenger 1998〕。その過程では「実践コミュニティ」(community of practice)というモデルを設定し、実践への参加の深化に伴い、コミュニティの中での役割、成員との関係性、さらには学習者自身のアイデンティティにも変化が生まれる。学習者の参加形態の変化は、すなわち、集団への出入りが許されるが、同時に「見習い」として位置づけられる「正統的周辺参加」から、そこから「古参」と呼ばれるような技術的・社会的な全てを身に着けた「十全的参加」(full participation)に移行する、と捉えられている。レイヴとウェンガーは産婆、仕立屋、海軍の操舵手、肉加工職人、アルコール依存者の徒弟制を事例に挙げているが、本研究のような人で塔をつくる技術を身に着け、アソシエーションとしての維持・発展を目指す集団についても、実践コミュニティと捉え、LPPの視点を採用できると考える。

ただし周知の通り、1990年代初めに提唱されたLPP論にはこれまで多くの批判もあった。その中で本研究の関心から、特に、「十全的参加を果たした成員のその後の実践」についてはほとんど問題にされていない点を指摘し〔ハンクス 1993: 9 ; 竹内 2011: 414〕、その分析を試みた。その指摘がなぜ重要かと言えば、十全的参加者の実践コミュニティへの関わり方は、コミュニティや実践そのものに深い変容をもたらす可能性があり、他のコミュニティと区別されるような示差的特徴の形成にも大いに関係するからである。実践コミュニティにおける学習過程では、十全性を体現する古参者の存在は欠かせないし、レイヴとウェンガーも、新参者の学習過程は(古参者となるべく)向心的(centripetal)に進むとしている。だが、本研究が対象とする人間の塔チームのサンツには、十全的参加を果たし、十分な技術とチームの正式メンバーとしての地位およびアイデンティティを獲得した後、継続して参加するでもなく、かといって辞めるわけでもない人びとが一定数存在する。本研究ではこうした傍目にはいわゆる「模範」とはみとめにくい正式メンバーについて、彼らを幽霊部員の代わりに「潜在的成員」と称し、十全的参加者と捉え直しながら、チームへの関わり方とチームの中での位置付けについて考察した。

十全的参加を緩やかに続ける潜在的成員は、多様な人びとが寄せ集まった状態(Assemblage)で、多様な関わり方のまま維持されているチームだからこそ生まれてくる存在である。つまり、正式なメンバーになっても関わり方は一様ではないのだ。自分にとってはそれ以上技術を向上させる必要がないと考えれば、練習には来なくなることも理解できる。しかし、練習に出席しないことは、サンツの一員としてのアイデンティティを失ったことを意味しない。チームとの関わり方に変化があるだけで、あくまで潜在的にサンツのメンバーであり続ける。チームもそれを知っていて、実演だけに来る経験(熟練)者をうまく利用するのだ。このように、十全的参加者と

いう視点から、サンツというチームの多様性と寛容性、そして違いを認め合いながらも高度な塔を建てられる鍵を抽出できたと考える。

【引用文献】

- Botella, Miquel (2018). *Castells: una història d'èxit*. Barcelona: Galàxia Gutenberg.
- ハンクス, W.F. 1993 「ウィリアム・F・ハンクスの序文」『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』, 産業図書
- 飯田卓 「人類学的課題としての文化遺産—二つの文化が会う現場」飯田卓編『文明史のなかの文化遺産』, 臨川書店、2017年
- レイヴ, J. & ウェンガー, E. 1993 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』, 産業図書
- 竹内一真 2011 「専門家の技能に関する先行研究と現在の動向」, 『京都大学大学院教育学研究科紀要』 57, pp.407-419
- Wenger, E. 1998 *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*, NY: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 竹中宏子	4. 巻 33(1)補遺号
2. 論文標題 カタルーニャの人間の塔 (Castells) を「支える」スタッフの活動と勧誘システムの民族誌 チーム「サンツ」(Castellers de Sants)を事例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 61-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 竹中 宏子	4. 巻 38
2. 論文標題 人間の塔チーム「サンツ」における十全的参加者のあり方と位置付け 潜在的成員に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生活学論叢	6. 最初と最後の頁 44 ~ 55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24528/lifology.38.0_44	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐野友紀, 村野良太, 加藤麻樹, 竹中宏子	4. 巻 34(1)
2. 論文標題 人でつくられる「人間の塔」に関する構造物としての工学的分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹中宏子
2. 発表標題 COVID-19 禍における人間の塔チームの「もがき」(活動): パルセロナの Castellers de Sants を事例に
3. 学会等名 日本生活学会第48回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹中宏子
2. 発表標題 カタルーニャの人間の塔完成に関するエスノグラフィ：塔を支える身体的な技術と責任感や信頼感
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 天までとどく人間の塔：人間科学的な感動の探究	開催年 2018年～2018年
----------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------